

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第21号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《 広報宣伝部 》

発行日：2023年12月 第21号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

Tel 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記 →

QRコードをご覧ください。



大地協ニュースへのご感想・記事テーマリクエストなど
上記担当窓口まで皆様のお声を頂けましたら幸いです。

未来のために何ができるのか

ふと気がつけば12月も半ばになっており、2023年も終わろうとしています。今年は何やら慌ただしく不穏な1年でした。ロシアによるウクライナ侵攻も長期化したまま、今度はイスラエルのガザ地区でも紛争が発生しました。民間人への被害の報道を見るたびに心が痛みますが、長い歴史的経緯を考えると民族問題・宗教問題の根深さが露呈しており抜本的な解決には程遠い印象を受けます。昨年度と比較して世界中の武力紛争が1.3倍に増えているというデータも出ています。日本においても台湾有事が発生した際には、先島諸島から熊本へ避難ができるような要請がなされたり、また最近の報道でも世界的な不作や紛争時の食料危機に備え、米やさつまいもなどカロリーの高い作物を作ることを指示できるような仕組みも検討されるとのことです。色々な情勢を鑑みると、日本も対岸の火事ではないのかもしれませんが。

戦争だけではなく社会的な課題も山積みです。多くの業界（建設、医療・介護、運送、飲食、IT、農業・漁業）での深刻な人手不足、少子高齢化、都市への人口集中、災害対策など、もはやどこから何をしたら良いのかわからないくらいです。

そんな暗いニュースばかりですが、12月2日～3日に初の東京開催で児童部会が開催されました。詳しい報告は他の方が書くと思いますが、私も大地協のスマイル会（中高生活動）の子どもたちと一緒にマイクロバスで東京まで行き、国際子ども権利センター代表理事の甲斐田先生より「子ども権利条約」について、東海地協や東地協の皆さんと一緒に学びました。第二部では、子どもたち自身が大阪での取り組みをしっかりと発表している姿を聞きながら、大人には無い自由な発想を心強く感じました。この子どもたちに対し、どのような未来を残せるのか。先送りにすることなく、今の私達がしっかりと考えていかないとはいけません。

大地協は大阪市社会事業施設協議会の一角を担っており「地域福祉」を担う団体です。大変な未来だからこそ地域福祉の課題はなくなりそうにありません。地域福祉やセツルメントというと感じますが、私は「居場所づくり」と感じています。施設職員・地域住民・利用者・他施設の職員など色々な関係性が、互いに頼り頼られる関係になることが、その人の居場所にもなり、多様な課題解決への取っ掛かりとなると思います。施設長だけではなく、若手からベテランまで多くの熱意ある職員をも巻き込んで活動しているのが大地協の特色です。この特色を活かし、大地協でも何か具体的なアクションができないかということを毎回の企画委員会で話し合っています。

ハマスは、もともとはガザ地区を中心に教育、医療、福祉など貧困層へ社会福祉活動を展開していた団体だったそうです。まさにセツルメントです。しかし現状が改善されない怒りが、その熱い気持ちを過激化していったのでしょうか。大地協は熱い気持ちをもちながらも、冷静な議論、丁寧な活動をしていくことができればと思います。年が明けるとまずは大地協バザーが予定されています。（やまと保育園は2月17日です！）まずは会員施設の皆様、個人会員の皆様、地域の方がつながることのできる場になればと考えています。引き続きご協力をお願いします。

地域に根差した保育園を目指して



安立保育園は、平成17年に委託、平成27年に民間移管となり、早19年を迎えようとしています。委託当初は、公立の所長・主任以外の全ての職員が入替わり、公立保育所の保育を引き継ぐといった形で1年目が始まりました。経験のある保育士から新卒保育士で、子どもの笑顔のために無我夢中で保育をしてきました。その間には、色々な出会いを繰り返し、現在の安立保育園があります。保育園は阪堺軌道の車庫近くに隣接していて、常に阪堺電車の「ちんちんちんちん」という音やお散歩に出かけると気軽に電車の中から車掌さんが手を振ってくれたりします。

委託時は、わくわく広場（地域交流）を引き継ぎ実施し、未入園児が園に遊びに来て園児たちと自然な形であそぶ交流を行ってきました。その次に始まったのが「ぼちぼちいこかさん」という地域のお年寄りを含めた方々の「絵本の読み聞かせ」で、十数

年、保育園へ月一度、来園していただき、子どもたち一人ひとりに優しい眼差しで絵本を読んでくださいます。中にはゴソゴソしてお話の邪魔をしてしまったりと色々ありますが、“そっと優しく笑いかけ”子どもたちを温かく包み込むように子どもたちの心の中に柔らかな風を吹かせてくれ、子どもたちの大好きな存在になっています。卒園してもその繋がりは継続し、小学校での読み聞かせや近所へお買い物に行った時に出会う事も多いようで、「ぼちぼちさん」と気軽に声をかけたりと園外での絆も強いものとなっています。この19年で卒園生がしょっちゅう立ち寄ってくれたり、6年生の同窓会を楽しみにしてくれる子どもたちや、高校卒業時に集まりたいと自分たち自身で連絡をとりあって“20歳になったら！”とタイムカプセルを埋めたり、この地域に少しずつですが根付いてき始めました。少しのきっかけづくりを私たちが行う事で、地域との関わりが増え、子どもたちが楽しく過ごすうえで大切な地域との絆ができてきたと思います。コロナ発症から、今まで以上に地域との関わりが難しくなっていますが、お散歩の時に「あそびにきたよ」と以前よく訪ねていた近隣のデイサービスに出かけるなど、身近な事から再開し、関わりを広げていきたいと思っています。また、地域には一人暮らしのお年寄りの方や支援を必要とされる方などの事などと、まだまだ目を向けれていませんが、職員と一緒に、少しずつ地域福祉に目を向けられるようにすすめていきたいと思っています。

社会福祉法人 なみはや福祉会
安立保育園 中野 純枝

ひろがれ!!みんなの笑顔♪



令和5年2月に新園舎が完成しました。50年の歴史を刻んだ旧園舎が取り壊されていく様子は寂しく感じましたが、園舎が出来上がるにつれ期待と喜びでいっぱいになりました。仮園舎での保育は、慣れない環境に加え、新型コロナウイルスが猛威をふるっていることもあり、行事を中止にしたり、形を変えて実施したりと手探り状態で過ごしたのを思い出します。もちろん地域の方との交流もできない状況。新園舎に移動して、新型コロナ感染症は5類感染症へ移行され、制限がなくなりました。今年度は今まで実施していた様々な行事を復活させよう！と進めています。そのひとつに、隣保館での地域のお年寄りが集まれる『ふれあい喫茶』があります。「ここに来て嬉しいわあ。」とたくさんの方が笑顔で来てくださいました。簡単な手作りおやつを食べながら賑やかな談話が始まります。みんなでビンゴゲームや折り紙をしたり園児達との交流もあり、その時の皆様の優しい眼差し、嬉しそうな笑顔はととも心が温まります。子ども達も、拍手をしてもらったり、「上手やね。ありがとう。」と声を掛けてもらい嬉しさと誇らしさの笑顔でいっぱいになっています。

「ここに来るのが楽しみや。また始まってよかった。」との言葉をいただき地域の方々と集える状況に喜びと使命を感じます。来る楽しみ、来てもらえる喜び、人との触れ合いの温



もり、たくさんのいいこといっぱいです。先日、園庭で焼き芋をしました。煙がモクモクで近所にご迷惑だったかな…と心配しましたが、子ども達とおすそ分けに回った時に皆さん笑顔で、「大丈夫よ～季節を感じるいい匂いやったよ。おいしそうなお芋をありがとう。」「いつも、おうた歌ってくれてありがとね。また行かせてね。」との言葉をいただき子ども達もにっこり。今年度は、「バザー」や「おもちゃつき」もあります。創設者である三木達子先生の「地域に根ざした今川学園」を目標に、今後も出会い触れ合いを大事にしながら赤ちゃんからお年寄りまでの方たちが居場所作りを目指していきます。

社会福祉法人 今川学園
今川学園 主任 高野 員江

「中学生以上の居場所が無いやん」 先生 居場所ってむっちゃ大事やねんで〜

2003年阪神タイガースが優勝した年から始まった「中学以上キャンプ」。大人たちの創った社会の影響で安心できる居場所が奪われ、子どもたちは様々な課題を抱えていた。子どもの評価を成績のみの数値で序列化し競争させる社会の片隅で苦しんでいる子どもたちは、無気力・不登校やリストカット、家に帰らず酒やたばこドラッグ、そして自分たちより弱者を探し、いじめや暴力で正常の反応を大人たちに示した。家に帰りにくい中高生、クラブや塾に行っていない中高生、高校を途中で辞めた青年の居場所は地域には存在しなかった。私たちと関わる子どもたちも同じく、安心した居場所を模索していた時代でもあった。2001年から始まった「山の家」のワークキャンプに子どもたちを誘い(子どもたちが参加するだけのキャンプではなく、自分たちで考え創り上げていくキャンプ)、ワークキャンプを通して子どもたちが繋がり、子どもたちと一緒に2003年生まれたのが「中学以上キャンプ」であった(2003年大阪から山の家まで100kmを自転車走破したのも中学以上の活動の目玉の一つでした)。中断していた大地協としての中学以上の活動が、居場所のない子が増えてきたこともあり2016年「中学以上会議」として再開した。当初は一つの施設での活動であったが、2018年「中学以上キャンプ」を再開してからは、参加施設が徐々に増えていった。



2003年大阪から山の家まで
100kmを自転車で走破!

「私たちの居ない所で私たちの事を決めんといて」

もう一つ日本地域福祉施設協議会が主催である「全国児童部会」がある。2001年に西成のとある店で「全国地域福祉施設研修会」はセツルメントをバックボーンに地域福祉など、児童・高齢・障がいに分けることなく話し合える貴重な研修会であるが、もっと子どもに特化した部会を持つことは出来ないものかと、2002年大地協「山の家」で第一回「全国学童・児童部会」が開催された。毎年大阪と名古屋が企画・運営を交互に引き受け、試行錯誤しながら続けてきた児童部会であったが、2022年度の名古屋と大阪の実行委員会の中で「児童部会と謳っているのに、何故児童、当事者の子どもたちが参加していないのであろう」という当たり前の話が出された。支援する側とされる側、私たちが求めている地域福祉と反対に向かっていた。この年の名古屋での児童部会のメインテーマは「子どもの権利条約」であり、子どもと大人が対等に学び話し合う場が実現した。大阪から参加した子どもたちの声は「むっちゃ面白かった」「今日勉強したことをもっと学んでみたい」「名古屋の子どもたちとも話が弾んだ」...自分たちの事は自分で考える未来を創る全国児童部会となった。

「安心・安全・自由=居場所、そして」

2023年度の全国児童部会の会場が「東京」に決まった。一人に掛かる費用は軽く見積もっても4万円は必要である。しかし、子どもたちは諦めなかった。4月に中学以上会議の実行委員会が発足した。中学以上会議という固い名称でなく、自分たちでこの会の名前を付けみんなに承認してもらおう。名称は「スマイル会」に決定。東京に行く資金を作るために、スマイル会のオリジナルTシャツを作って販売しよう。スマイル会のロゴを作成し、Tシャツが完成した。100枚作ったTシャツも徐々に売れていったが(強引に職員に買わせる方法)まだまだ費用が足りない中、10/28と11/3の2回、地域の祭りに出店し、子どもたちが用意・運営・片付け、東京に行けない子どもたちも参加して、東京に行くための費用を創り出した。全員の東京に行く費用には届かなかったが、自分たちで考え自分たちで行動した。まさに子どもたちが目的を持ち主体となった活動であった。中学以上キャンプの助成金もあと数年で終わるため、子どもたちが引き続きキャンプを実施したい場合は、自分で行動してお金を捻出することも学んだ。誰かに言われたのではなく、自分たちで自分たちの求める社会活動に向けて動く。「まだまだ難しい事は分らんけど、みんなでやったら一緒だったら、なんでもできそうな気がする」...私は私から、私は私たちに。そして、各施設の子供から、大地協という団体への帰属意識が高まった。「安心」「安全」「自由」「おもしろさ」を大切にしたらどこから始まった小さな活動が、居場所になり、そして子どもたち主体の活動へと広がった。



Go! Go! スマイル会!!

★次号★

『研修会2部はスマイル会に任しとき』
『私たちが東京と名古屋に火を付けたるねん!』
に続きます。

社会福祉法人 石井記念愛染園隣保事業
愛染橋保育園 児童館主任 吉田 正義

＝ ちがいを豊かさに ＝ 日韓保育交流30周年を迎えて

アンニョンハセヨ！！子どもたちが韓国のオリニチップ（保育園）から来られた研修生に笑顔で声をかけ、その瞬間、少し緊張した表情だった、2人のソンセンニン（先生）の表情が一気に緩み、笑顔に変わりました。文化や習慣が違っていたり、言葉が通じなかったりしても、日々子どもたちにかかわる保育者の子どもを思う気持ちは、同じだと感じた、4年ぶりに再開された第26回日韓保育交流研修の初日の風景でした。今から31年前、望之門保育園を含めた3ヶ園の保育園の関係者が、韓国光州、ソウルの保育施設を訪問したことから、韓国の保育園との交流が始まりました。その翌年からは毎年交互で、互いの国に研修生を派遣、そして受け入れを行い、両国でそれぞれ協議会が作られて、保育の学びを深めてきました。研修生を派遣しての保育交流は、両国合わせて27保育施設で、26回行われ、研修生の数は165名にも及びます。

1992年当時、日本の韓国併合という歴史的背景の影響を受け『近くて遠い国』と言われていた日本と韓国ですが、私たちはこれまで草の根の交流の時と場所を積み重ねてきました。30年という長い月日の中で、互いの国や園の保育を取り巻く環境、保育方法の違いを知ると同時に、「一人ひとりの子どもを大切に作る心」や「子ども自身がありのままの自分を愛することができるようにと願う心」が同じであるということも知りました。

これまでの交流の歩みの中で、2009年に日本で新型インフルエンザが流行した年そして2020年からの新型コロナウイルス感染症の世界的大流行の3年間は、互いの国を行き来することが叶わず、研修生の派遣を中止せざるを得ませんでした。更に30周年を迎えた昨年には、韓国光州で30周年の記念行事を行う予定が無期延期となっていて、先の見えない時が流れました。しかしそのような状況を逆手にとって、オンラインでの会議等を駆使して、互いの国の状況や、この交流を未来に繋いでいくための思いを語りあい、ついに先日11月4日に、韓国の先生方にも来日していただき、未来へつなぐ～ちがいを豊かさに～というテーマで、30周年の記念行事を開催することができました。

今年の研修生が保育交流研修の感想の中で「子どもたちは、自分（研修生）の言葉が、日本の言葉と違って、通じていない気がついた時、違うということを嫌がるのではなく、もう一度ゆっくり話しかけてくれ、ジェスチャーで伝えようとしてくれる姿があり、とても感動しました。」と話してくれました。子どもたちの対応はとてもシンプルですが、違うことで、知る喜びが生まれ、そして心が豊かになる。そんな違うことの素晴らしさに気付かせてもらったエピソードでした。これから先の未来も、このような子どもたちの心の育ちを大切に、保育交流の歩みをすすめていきたいと思えます。

日韓保育交流協議会
韓国側の皆様よりいただいた『多文化人形』



あぼし
社会福祉法人 阿望仔

望之門保育園 園長 竹林 弘美